

マルカム・ノールズのアンドラゴジー論にもとづく 成人へのピアノ指導の実践的研究¹⁾

み かみ きょうこ・ほり しげ お**
三上 香子*・堀 薫夫**

*大学院健康科学専攻(修了)・**教育心理科学講座

(平成30年4月24日 受付)

本稿は、マルカム・ノールズのアンドラゴジー(成人教育学)論の成人へのピアノ指導に対する適用性を、成人学習者の自己決定性を促す特徴をもつ『滝本式ピアノ教本』を用いて実践面から検証したものである。11名のピアノ指導者にこの教本を用いて成人へのピアノ指導を依頼した調査結果からは、アンドラゴジー論の柱となる、自己決定性を活かした学習支援および指導者の成人への教育の重要性の自覚化に関して、一定の有効性が示された。アンドラゴジーの他の要素については今後の検証が求められた。

キーワード: アンドラゴジー, マルカム・ノールズ, 成人へのピアノ指導

I はじめに

マルカム・ノールズ(Knowles, M. S.)は、子どもと成人/大人の学習者特性の相違に着目し、成人教育学の体系の構築を試みたアメリカの成人教育学者である。彼は、子どもを対象とした教育がペダゴジー(pedagogy)と呼ばれるのに対して、成人に向けた教育学の体系をアンドラゴジー(andragogy)と命名した²⁾。またノールズは、その著書のなかでリンデマン(Lindeman, E. C.)の成人教育編やロジャーズ(Rogers, C. R.)の人間性心理学の学習論などをふまえて、成人教育について5つの基本的仮説をうちたてた³⁾。さらに、ノールズが晩年に第6の柱(「知る必要性」)を示したことから、最終的に彼のアンドラゴジー論の柱は、図表1に示した6つとなった⁴⁾。

図表1 ペダゴジーとアンドラゴジーの考え方の比較

	ペダゴジー	アンドラゴジー
自己概念	依存的	自己決定性の増大
学習者の経験	あまり価値がおかれぬ	学習のための豊かな資源である
学習へのレディネス	生物的発達・社会的プレッシャー	社会的役割の発達段階
学習への方向づけ	教科内容中心	問題領域中心
学習への動機づけ	外部からの賞罰	内的な誘因, 好奇心
学習者の知る必要性	あまり重要ではない	重要である

(マルカム・ノールズ『成人学習者とは何か: 見過ごされてきた人たち』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房, 2013年, p.144をもとに作成)

上記のようにノールズは、成人の学習者と子どもの学習者への学習支援原理を分類した。しかしノールズは、成人に対するペダゴジー・モデルの適用を否定しているわけではない。彼は、アンドラゴジーはある意味ペダゴジー・モデルをも包み込む体系でありイデオロギーではないと記したうえで、ペダゴジーが必要な状況では成人へのペダゴジー的方法を援用するほうがよいと指摘している⁵⁾。これらをふまえ最終的にノールズは、成人学習の中核的概念は自己決定学習(self-directed learning)にあると主張していると考えられる⁶⁾。

ノールズは自身のアンドラゴジー論を、看護・企業内教育・大学開放などのいくつかの実践領域に適用して

いる⁷⁾。しかし成人のピアノ教育指導に関する適用は示されていない。その理由の一端は、上記の実践とは異なり、ピアノ教育の主な対象者が内外ともに青少年であることだと考えられる。しかし社会の少子高齢化にともない、今後成人期以降の者へのピアノ教育は重要となってくるものと思われる。

II 研究の背景と目的

筆者（三上）は、以前に大阪教育大学大学院教育学研究科において、趣味のピアノ学習者が満足するピアノ指導には、（成人特性を活かした教育学を提唱した）ノールズのアンドラゴジー論が適用できるのでないかという仮説をもとに研究をおこなった（これを「第1研究」とする⁸⁾）。そこでは、学習者の知識や過去の経験を有効活用しようとする姿勢と、学習者の動機について知ろうとする姿勢の2点において、指導者の意識改革が可能であるならば、ノールズのアンドラゴジー論をもとにしたピアノ指導が可能であるという結論を示した。しかしこの研究結果からでは、アンドラゴジー論が成人のピアノ指導に完全に適用されるとはいえない。なぜなら、理論上ではたしかにその適用性は示唆されたが、それはまだ実践されていないからである。

そこで次に三上は、実践研究を行うためには成人用ピアノ教材が必要であると考え、滝本裕造の『ピアノの基礎』に着目した⁹⁾。練習するときには楽譜を見ないという『ピアノの基礎』がもつ楽譜にとらわれない指導法に、成人学習者の自己決定性を促す可能性があるかと判断したからである。そこで『ピアノの基礎』をもとにモニター教材を作成し、三上の知人のピアノ指導者にピアノ学習者を対象にしたモニター指導を依頼した（これを「第2研究」とする¹⁰⁾）。その結果、『ピアノの基礎』をもとにした成人向けピアノ教材は、アンドラゴジー論の実践研究に有効であると考えられた。そこで、この調査結果をもとに『ピアノの基礎』に変更を加え、『滝本式ピアノ教本』を作成した。次の図表2は、両者の主な変更箇所を示したものである。

図表2 『ピアノの基礎』と『滝本式ピアノ教本』の内容の相違点

		ピアノの基礎	滝本式ピアノ教本
ウォーミング・アップ		<ul style="list-style-type: none"> ・完全な暗譜演奏 ・4オクターブ両手奏 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾きながら徐々に暗譜 ・1オクターブ <u>両手または片手を自由選択</u> ・コード学習（筆者が追加）
課題曲	写譜	<ul style="list-style-type: none"> ・記譜法に則った正しい写譜 ・指定された調への写譜 	<ul style="list-style-type: none"> ・写譜は本人がわかる程度でよい ・原調以外の写譜は<u>任意とする</u>
	暗譜	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞唱・階名唱は必須 ・指定された伴奏形での練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞唱・階名唱は<u>任意とする</u> ・伴奏形は<u>自由選択</u>
	移調	<ul style="list-style-type: none"> ・全調 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハ・ト・ニ・ヘ長調のみ

上記表の下線部のように『滝本式ピアノ教本』は、ノールズのアンドラゴジー論の中心仮説である成人の自己決定性（self-directedness）を促す方向の成人用ピアノ教材として作成された。彼のアンドラゴジー論の柱がこの自己決定性にあると考えたからである。「学習者の経験の活用」については、日本人になじみのあると思われる曲を選択し、「知る必要性」に関しては最初に学習の目標と方法を学習者・指導者双方で確認をするという手続きをとった。動機づけについては指導者の判断に委ねた。なおレディネスや方向づけに関する組み込みはおこなっていない。これらにもとづきノールズのアンドラゴジー論（あるいは自己決定性）の適用性を、ピアノ教育の実践面から検証することを次の研究の目的とした（これを「第3研究」とする）。具体的には、成人を指導している自宅ピアノ指導者に対し、成人学習者の自己決定性を促す『滝本式ピアノ教本』を使用し、成人学習者を援助する方向での介入調査を依頼し、指導開始時と終了時に意識調査をおこなうことで、指導者の意識の変化をみた。

III 調査協力者と調査方法

1. 調査協力者

本研究（第3研究）の調査協力者は、現在成人へのピアノ指導をしている自宅ピアノ指導者（全員女性）11

名である。下記の図表3の○印は、それまでの調査協力歴を示し、()内の数字は、指導をおこなった成人学習者数を示している。指導の対象とした成人学習者は、定期的に指導者宅でレッスンを受けている20代後半から70代前半の女性24名であった。

図表3 調査協力者のプロフィールと調査協力歴

	年齢層	成人の指導歴	第1研究	第2研究	第3研究
A	50代	30年以上	○	○	○(2)
B	40代	10年未満	○		○(3)
C	40代	1年未満	○		○(1)
D	40代	5年未満	○		○(1)
E	40代	25年未満		○	○(1)
F	40代	10年未満		○	○(3)
G	50代	15年未満			○(2)
H	30代	20年未満			○(4)
I	40代	20年未満			○(3)
J	40代	20年未満			○(2)
K	50代	1年未満			○(2)

(2017年2月現在；()内数字は指導をおこなった成人学習者数)

2. 調査方法

本実践研究では、ピアノ指導者への介入調査のほかに、介入調査の最初と最後での意識調査をおこない、その後総括調査と追加調査を実施した。介入調査は、2016年8月11日から2017年2月2日にかけて、ほぼ月に2回のペースでおこなわれ、この最初の日と最後の日に、以下の図表4に示した8項目の調査をおこなった(8番目の質問のみ最初の日だけで実施)。これらは以前の第1研究と第2研究でも尋ねられたものである。

介入調査の流れとしては、まず調査協力者の個人的属性と自宅ピアノ教室運営にかかわる項目についてメールまたはインタビューにて質問をした。次に意識調査の質問(図表4)を実施し、『滝本式ピアノ教本』を渡して介入調査を依頼した。そのさいに調査協力者には、学習者の知識や経験を活かしたかたちでの指導をおこなうこと、学習者の学習動機について深く知る努力をすること、学習者を支援する方向で指導をおこなうことの3つの条件を示した。

指導終了のめやすは、テキストの第1章(「5指のメロディをひこう」まで)とした。学習者の上達状況や教室の稼働スケジュールに合わせて指導回数や内容を柔軟に対応させること、学習者と指導者がつねに互いに話しやすい雰囲気の中で調査をおこなうよう心がけることの2点を留意点とした。また、調査終了時に調査報告書を提出してもらい、再度、調査開始時と同じ意識調査の質問に回答することで調査完了とした。

介入調査が終了した半年後に総括調査を実施したが、これは介入調査の感想を尋ねたものである。総括質問の依頼は2017年8月5日におこない、同年8月末日を締め切りとした。方法は、メールフォームを使ったアンケート調査と面談や電話によるインタビュー調査である。

その後、調査時に顕著な変化がうかがえたと判断された2名の調査協力者(AとC)のみに対して、その回答内容をより深く探るために電話による追跡調査をおこなった。具体的な期日は、2017年9月24日と25日で、1名あたりの所要時間は1時間弱であった。

なお一連の本調査の倫理的配慮に関しては、各調査時に、調査で得られた知見は論文作成以外には使用しないことなどを各協力者に告げるという方法を採用した。

図表4 意識調査の質問

- ・大人の学習者に対してどのような印象をもっているか
- ・大人をどのように指導しているか、
- ・過去にピアノ経験をもつ大人に対してどう思うか、
- ・大人の学習者の意見や要望に対してどのように対応しているか
- ・レッスンの目標・手順の決定権は誰か
- ・大人の学習者の到達目標は何だと思うか
- ・大人の学習者が望む学習方法は何だと思うか
- ・指導者自身の過去に受けたピアノ指導はどんなものであったか(意識調査開始日のみに実施)

IV 調査結果

ここでは、はじめに第1研究の結果の検討として、介入調査の留意点にて示した「成人学習者の過去の経験の活用」と「成人学習者の学習動機」の回答を記載する。次に、意識調査と追跡調査の結果、総括調査の結果の順に述べる。

1. 第1研究の結果の検討

本研究では成人学習者の過去の経験の活用に関して、学習者の過去の経験を、ピアノ学習経験に限定して調査した。その理由は、第1研究のさいに示された成人学習者の過去の経験が、ピアノ学習経験を中心にしていたからである。本期間では、調査協力者から「他の先生の指導を知ることでもできるので大変興味深い。まったく初めてという方より楽に教えられるので正直助かる」(B)、「不思議と子どもの頃よりむずかしい曲がすぐに弾けるようになる」(F)という回答が示された。

次に成人学習者の学習動機では、第2研究とほぼ同じ回答が示された。具体的には、「ボケ防止」(J)、「ピアノが家にあったから」(ほぼ全員)、「子どもの手が離れたから」(A, G, J)、「退職したため」(F)、「他の習い事に役立ってるため」(D, F, J, H)、「子どもが今の先生に習っていた」(A)、「好きな曲を弾くため」(B, F, G)であった。なおここでの回答は、調査協力者が、成人学習者との会話のなかからかれらの学習動機を探ったものではなく、今回の調査のために学習者に直接学習動機を尋ねたものである。

2. 意識調査と追跡調査の結果

第3研究の意識調査での、「大人の学習者に対してどのような印象をもっているか」という成人学習者への印象を尋ねる質問に対して、発言に顕著なちがいがみられたのは、A, C, H, Jの4名であった。具体的には、AとCは、第1研究のさいには成人に対して「進歩がない」(A)、「細かいことを言う」(C)と発言していたが、第3研究で実施した意識調査では、「(成人学習者は)達成感がよくわかる」(A)、「前向きで明るい」(C)と述べた。またHとJは、介入調査の前後において発言に変化がみられた。具体的には、「自分の意見を押し通す」(H)、「注文が多い」(J)が、「熱心である」(H)、「音を楽しんでいる」(J)と述べられた。これらのことから、調査協力者の発言が変化することが確かめられた。

そこで、第1研究から介入調査後までに実施したすべての意識調査の発言をKJ法でカテゴリー化したところ、「レッスンの目標・手順の決定権はだれか」という学習の主体を表わす質問への回答によって、他の意識調査の回答が影響されていることがあきらかになった。具体的には、「学習の主体は指導者である」と回答した場合は、成人学習者に対してあまり好意的な発言がみられなかったが、「学習の主体は学習者である」と回答した場合には、成人学習者に対して好意的な発言がみられたということである。次の図表5は、学習主体についての回答を時系列に並べたものである(変化のあった部分には下線を施した)。「双方」とは、「レッスンの目標は学習者だが、手順の決定権は指導者である」というように、両方の回答をした場合をさす。

図表5 学習の主体のとらえ方の変化

	第1研究	第2研究	第3研究	
			介入調査(前)	介入調査(後)
A	指導者	双方	学習者	学習者
B	学習者		学習者	学習者
C	指導者		学習者	学習者
D	指導者		指導者	指導者
E		学習者	学習者	学習者
F		学習者	学習者	学習者
G			学習者	学習者
H			指導者	指導者
I			指導者	双方
J			双方	双方
K			指導者	学習者

(下線部分は変化のあったものを示している)

図表5からは、A、C、I、Kの4名に、学習の主体が指導者から学習者へ（または双方へ）の変化がみられた。そのうちAとCは、第1研究から介入調査のまえまでに変化がみられ、IとKは介入調査の前後で変化がみられた。

以上のように、成人学習者の印象や学習主体に対する質問では、A、C、H、I、J、Kの6名に変化が示された。なお、彼女らのうちH、I、G、Kの4名は、第3研究のみの調査協力者であることから、意識に変化がおこったきっかけは介入調査であると考えられる。しかしAとCの2名については、介入調査前にすでに意識に変化がみられたことから、変化のきっかけが不明であった。

そこで、この2名に対して、追跡質問として変化のきっかけについて尋ねた。その結果、Aは「自分の回答の変化には気づいていなかった。現在は成人の指導を楽しんでいる」と述べた。また、第1研究のさいの発言については、「当時は夫の定年や息子の就職など家庭が過渡期だったから」と述べた。他方Cは、「第1研究でのインタビュー調査がきっかけとなり、成人の指導に興味をもった。その後は、筆者や友人の大人のピアノ指導者と話をすることで、成人を指導することの楽しさを知り、現在は積極的に成人のピアノ学習者を募集し、指導している」と回答した。

意識調査では、調査協力者自身が過去に受けたピアノ指導をもたずねている。これによると調査協力者のすべてが、「厳しかったが、現在の自分があるのは過去の先生のおかげである」と回答した。しかし、指導者に対して感謝の気持ちをもちながらも、自分が受けた指導に対して、「聞きたいことも聞けない一方的なレッスンだった」(C)、「ただ厳しただけだった」(I)というように、あまり快く思っていない調査協力者も存在した。このように、ピアノ指導者の多くは、理想と現実のギャップを抱えながら指導をしていることがあきらかになった。また、B、F、Gは、自分が受けた指導を振り返り、「ピアノ以外の知識に富み、学習者に寄り添う姿勢をもっていた」と共通の回答をし、「自分もそのような姿勢をもつピアノ指導者をめざしている」と回答した。

3. 総括調査の結果

総括調査では、介入調査に対する指導者からみた成人学習者の発言や態度と、指導者の感想について尋ねた。「調査協力者からみた成人学習者の発言や態度」については、「楽譜がすらすら読めるようになった」「ピアノ学習が意欲的になった」(A)、「間違いを自分で聴きとれるようになった」「練習課題を自分で選ぶ経験をしたことで、自由曲も自分で選曲するようになった」(E)、「調性の認識ができた」「片手ならできる、これぐらいならできると演奏に自信がもてたようだ」(F)、「調や和音のことをもっと知りたいと言っていた」(I)といった発言が示された。

次に調査協力者の感想では、「成人には、学習目的にそれぞれちがいがいることを知った」(C)、「大人の方は目的がはっきりしているということに気づいた」(D)というような成人学習者に対する感想とともに、「(成人学習者への) 苦手意識が解消された」(C)、「大人の生徒が求めているレッスンを考える機会になった」(D)、「教材選びは大切だと思った」(E)、「ピアノは演奏だけでなく、総合的に取り組む必要を感じた」(G)、「成人のレッスンを良くするように考えるようになった」(H)、「高齢で初心者の大人のピアノ指導方法をもっと勉強していきたい」(K)というように、成人の指導に関する感想が示された。

V 調査結果に対する考察

1. 第1研究の結果の検討に対する考察

成人の過去の経験の活用に関する質問では、指導者が学習者の経験を活用している例と、学習者が身体知として自身の経験を活用している回答が示された。しかし、ノールズがいう経験の活用は、成人学習者の経験を指導者が学習者のために有効活用することであることから、示されたこれらの活用例は、ノールズのアンドラゴジー論に則した回答例とはやや異なるとも考えられた。

成人学習者の学習動機に関する質問では、ノールズがいうように、社会的役割からの解放や好奇心が示された。しかし、ピアノ学習が継続学習であることを考えると、これらの学習動機は、たんなる学習のきっかけにすぎない。ピアノ学習における成人学習者の学習動機については、指導者がアンドラゴジー論の枠をこえて内

発的に学習継続をしていく部分の把握が必要であると考えられる。以上のことから、第1研究で示された2点については、現時点では未定であると判断した。

2. 意識調査と追跡調査の結果に対する考察

意識調査・追跡調査の結果では、長期にわたって意識の変化がみられたにもかかわらず、自分の変化に気づいていない調査協力者が存在した。その協力者は、第1研究のインタビューのさいに成人学習者の指導に対して消極的だった理由として、家庭内の問題をあげた。しかし彼女は、成人の指導歴が長いベテラン指導者である。問題が解決した暁には、もともとこなっていたペダゴジー・モデルの指導に戻るほうが自然だと考えられた。しかしそうではなく、成人学習者に対してアンドラゴジー・モデルでの指導へ移行した理由については、彼女自身から話されることはなかった。したがって、意識調査と追跡調査の結果からは、成人のピアノ指導に対するピアノ指導者の意識は、長期的にも短期的にも、また無意識にも意識的にも変化する可能性があることが示されたにとどまった。

3. 総括質問の結果に対する考察

調査協力者からみた成人学習は、読譜力の向上や調性の認識など『滝本式ピアノ教本』の学習目標への到達課題の達成がみられた。さらに学習者自身が練習課題を決定することにより、以前よりもピアノ学習への満足感や達成感を感じ、意欲的に学習する様子も報告された。なお調査協力者からは、成人学習者が『滝本式ピアノ教本』のほかにも、自分が練習したいと思う曲（自由曲）においても、積極的に楽譜を選択して練習課題を自分で決定するようになるなど、自主性が発揮された例があげられた。これらのことから、『滝本式ピアノ教本』には、成人学習者の自己決定性を促進する可能性があることが示唆されたと考えられるだろう。

次に調査協力者の感想では、多くの調査協力者から、介入調査を通じて、成人の指導に対して積極的に取り組もうとする発言がみられた。このことより、成人には子どもとは異なった成人特性を活かした指導が大切であるという、ノールズのアンドラゴジー論の基本的仮説である、おとなを教えることの意義が確認できたとも考えられた。

VI 総括と今後の課題

第1研究では、成人を対象にしたピアノ指導において、「学習者の自己概念」「学習へのレディネス」「学習への方向づけ」の3点に関しては、ノールズの考え方があてはまると考えられたが、「学習者の経験と役割」「学習の動機づけ」の2点に関しては、今後の課題であると判断された。本期間の介入調査の結果においても、大筋ではその結論を進展させるものではなかった。しかし、アンドラゴジー論の柱となる、自己決定性を活かした学習支援および指導者の成人教育の重要性の自覚化については、一定の知見が得られたものともいえる。すなわち、学習者の自己決定性を組み込んだ教材の活用が成人に親和性があるという点や、こうした教材を用いたピアノ学習支援の重要性の自覚化につながっていったという点である。

本論では成人へのピアノ教育へのアンドラゴジー論の適用というよりはむしろ、アンドラゴジー論の要素、とくにその自己決定性を成人へのピアノ教育に組み込むことの重要性が示唆された。今後の課題としては、成人学習者の生活経験と親和的なピアノ教材の開発やピアノ学習の成果が必要とされる場面からの成人向けピアノ教育などを考えることにより、アンドラゴジー論の他の要素の実践的確認を進めることがあげられよう。他方で、習熟期間が長いとされるピアノ教育においては、成人学習指導においてもペダゴジー的要素を完全に払拭するわけにはいかないだろう。その意味ではペダゴジーとアンドラゴジーの融合という視点も残しておく必要があるだろう。

またピアノ指導者は、幼少期にうけたペダゴジー・モデルの指導が、現在の自分自身のアイデンティティと繋がることから、アンドラゴジー・モデルへの方向転換がむずかしい一面もある。これらは今後、ピアノ指導者が、成人へのピアノ指導についての学習の場をどれだけもてるかという経験値の問題と関連してくるだろうし、また青少年へのピアノ教育のあり方の見直しにもつながっていくであろう。

注

- 1) 本稿は三上香子『マルカム・ノールズのアンドラゴジー論にもとづく成人へのピアノ指導の実践的研究』(大阪教育大学大学院健康科学専攻(生涯教育学・図書館情報学分野)修士論文, 2018年1月提出)を下地として, 堀が大はばな修正・加筆を施したものである。
- 2) マルカム・ノールズ『成人教育の現代的実践: ペダゴジーからアンドラゴジーへ』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房, 2002年, p.38。
- 3) 堀薫夫『生涯発達と生涯学習』ミネルヴァ書房, 2010年, pp.127-129。
- 4) ノールズのアンドラゴジー論の基本的仮説の変遷については, Henry, G.W. *Malcolm Shepherd Knowles: A History of his Thought*. Nova Science Publishers, 2011, pp.185-186参照。アンドラゴジー論の柱は1970年当初は4つであったが, 最終的には6つになっている。本論では, 1990年時点の6つの柱を有するものを土台としている。
- 5) マルカム・ノールズ『成人学習者とは何か: 見過ごされてきた人たち』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房, 2013年, pp.77-79。
- 6) マルカム・ノールズ『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド』(渡邊洋子監訳) 明石書店, 2005年。self-directed learningには, 自己主導型学習など多くの訳語があるが, 本論では自己決定学習という訳語で統一する。
- 7) Knowles, M.S. & Associates *Andragogy in Action: Applying Modern Principles of Adult Learning*. Jossey-Bass, 1984.
- 8) 三上香子『アンドラゴジーの視点からみた, 成人のピアノ教育における学習指導に関する研究』(大阪教育大学大学院健康科学専攻生涯教育学・図書館情報学分野2013年度修士論文), 三上香子・堀薫夫「アンドラゴジーの視点からみた成人のピアノ教育における学習指導に関する研究」音楽学習学会『音楽学習研究』第10巻, 2014年, 49-60。
- 9) 滝本裕造『ピアノの基礎』一木楽器, 1984年。『ピアノの基礎』については, 三上香子「滝本裕造のピアノの基礎について」(公財)音楽文化創造『音楽文化の創造』第75号, 2016年, 32-35を参照されたい。
- 10) 三上香子「アンドラゴジーの視点からみた『ピアノの基礎』の実践的展開」音楽文化創造編『音楽文化の創造』(電子版vol.03), 2018年。

A Practical Study of Piano Instruction for Adults Based on Andragogy Theory of Malcolm Knowles

MIKAMI, Kyoko * and HORI, Shigeo **

* Department of Health Sciences (Graduated), Graduate School of Education

** Department of Education and Psychology (Lifelong Education)

This paper examined the applicability of Malcolm Knowles' theory of andragogy to adult piano instruction from a practical point of view, using "Takimoto-style piano textbook," which has the characteristics of promoting self-directedness of adult learners. From an intervention survey to 11 piano instructors, piano instruction using learner's self-directedness was supposed to be effective. Instructor's awareness of the importance of adult piano instruction was also detected. Other assumptions of andragogy was, however, remained to be a future issue to be solved.

key words : andragogy, Malcolm Knowles, piano instruction for adults